

# 103歳になってわかったこと

2015年4月12日  
朝日新聞広告

篠田桃紅

篠田桃紅 美術家

1913(大正2)年生まれ、東京都在住。

墨を用いた抽象表現主義者として、世界的に広く知られており、数えて103歳となった今も第一線で制作している。その作品は大英博物館、メトロポリタン美術館をはじめ、世界中の美術館に収蔵されている。

**「いつ死んでもいい」なんて嘘。生きている限り、人間は未完成。**

**自分の心が一番尊い、と信じて、自分一人の生き方をする。**

- 生まれて死ぬことは、考えても始まらない。 (人間の知能の外、人の領域ではないこともある)
- 自らに由れば、人生は最後まで自分のものにできる。 (意に染まないことはしない、無理もしない)
- 自らの足で立っている人は、過度な依存をしない。 (そもそも介入しない、期待もしない。負担にならない。)
- 自分という存在は、どこまでも天地にただ一人。 (自分の孤独を客観視できる人でありたい)
- 日々、違う。生きていることに、同じことの繰り返しはない。 (老いてなお、道なき道を手探りで進む)
- 体の半分はもうあの世にいて、過去も未来も俯瞰するようになる。 (まあいいでしょう、とあきらめることを知る)
- 長く生きたいと思うのは、生き物としての本能、年老いるとそうなる。 (103歳だからわかる。生きている限り人生は未完成)
- 枕に結びつけた心のひもを切って、精神の自由を得る。 (自分の年齢を考えて、行動を決めたことはない)
- 自然の一部として生まれてきただけ、と思えば気負いがなくなる。 (少しずつ自信をつけて、人はようやく生きています)
- 考えるのをやめれば、なにも怖くない。ただ「無」になる。 (歳をとるにつれ、日常に「無」の境地が生まれてくる)
- 夢中になれるものが見つかれば、人は生きていて救われる。 (頭で納得しよう、割り切ろうとするのは思い上がり)
- 受け入れられるか、認められるかよりも行動したことに意義がある。(人の成功を見届けてからの、後出しじゃんけんではつまらない)
- 予定や目標にとらわれると、外が見えなくなる。ときには、その日の風まかせにする。 (自分に規律は課さないし、外からも課せられない)
- 幸福になれるかは、この程度でちょうどいい、と思えるかどうかにある。 (いいことづくめの人はいない、一生もない)
- 真正面だけではなく斜めからも見てみる。新たな魅力があるかもしれない。(人と人の関係も、うしろからもよい、横からもよい)
- 知識に加えて、感覚も磨けばものごとの真価に近づく。(虫が知らせる、虫が好かない、を大切に)
- 運命の前では、いかなる人も無力。だから、いつも謙虚でいる。(どんなに愛する人でも、いつ奪われるかわからない)
- 時宜(じぎ)にかなって、人は人に巡り合い、金の言葉にであう。(医者「治りますよ」で、私は死病から生還した)